

『伊勢物語』における「友」・「友だち」

近藤 さやか

はじめに

『伊勢物語』の主人公「男」は、在原業平と思われる人物とされているが、物語中で「在原業平」と名前を明記されることはない。その一方で実名が明記される人物たちが登場する。彼らの多くは実際に存在した人物として特定され、史料から在原業平と何らかの接点を持っていたことが、先行研究によって明らかにされている。^注しかし、「男」^注在原業平ではないように、実名で登場する人物も実在の人物自身ではない。彼らは、実名とその実在に付随するイメージを物語に持ち込む。そして、『伊勢物語』という作品の中で「男」との関係を再構成する。主人公「男」の名前を明かさない『伊勢物語』中で、実名表記される人物が登場する意味は何か。

本論では、最も多く実名で登場する、紀有常が、実際の在原業平とは義理の父と息子という関係であったにもかかわらず、作品内で「友だち」と規定されていることに注目し、『伊勢物

語』における「友」・「友だち」について考察する。

一、紀有常と「ともだち」

紀有常は、第十六段・第三十八段・第八十二段に登場している。初登場である第十六段は、以下の通りである。

むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごとくもあらず。人がらは、心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にもにず。貧しく経ても、なほ、むかしよかりし時の心ながら、世の常のこともしらず。年ごろあひ馴れたる妻、やうやう床はなれて、つひに厄になりて、姉のさきだちてなりたる所へゆくを、男、まことにむつまじきことこそなかりけれ、いまはとゆくを、いとあはれと思けれど、貧しければするわざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だ

ちのもとに、「かうかう、いまはとてまかるを、なにこともいささかななることもえせで、つかはすこと」と書き、奥に、

手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつつ四つはへにけり

かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜の物までおくりてよめる。

年だにも十とて四つは経にけるをいくたび君をたのみ来ぬらむ

かくいひやりたりければ、

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

よろこびにたへで、また、

秋やくるつゆやまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける

第十六段の冒頭で紀有常は、「むかし、紀の有常といふ人ありけり」と、まるでこの段の主人公の如く登場する。「男の一代記風」と称される『伊勢物語』だが、「男」以外の人物で「むかし」と始まる段はこの段が最初である。「三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のこともあらず」と政治的な立場を失った人物として描かれ、「人がらは、心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にもにず。貧しく経ても、なほ、むかし

よかりし時の心ながら、世の常のこともしらず」と経済力も失っているが、風流さだけは失わないとされている。しかし、妻が出家することになり、家庭さえも失う。そこに物語主人公である「男」が「ねむごろにあひ語らひける友だち」として登場する。「男」と有常の関係を「友だち」と明確にしているのは第十六段のみである。出家する妻に「なにこともいささかなることもえせで、つかはすこと」しかできない貧しい有常を援助し、「友だち」は「夜の物」までを贈り返歌をする。

次に有常が登場するのは、第三十八段である。

むかし、紀の有常がいきたるに、歩いて遅く来ける

に、よみてやりける。

君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふ

らむ

返し、

ならはねば世の人ごとになにかも恋とはいふと問ひ

しわれしも

ここでは「男」が有常を尋ねて行ったが、留守で待たされたことで「恋」を知ったと詠む。「紀の有常がり」という表現や、改めて「紀の有常」の人物設定がされていないことから、第十六段で「ねむごろにあひ語らひける友だち」とされた二人の親しい関係は継続している。第十六段で、有常の妻は出家しており、「ならはねば」の返歌は自虐的にも読めるが、友情の親

しさを恋愛感情に置き換えた男性同士による疑似恋愛ともいえる戯れの和歌である。^{注3}

また、第十六段で「かの友だち」が有常に送った和歌は、「純千載和歌集」巻第十四（恋歌四）一五三九に業平を詠み人とし、「としだにもとをとよはへにけるをいくたび人をたのみきぬらん」とある。第十六段の対象が「君」だが、ここでは「人」であるという異同はあるものの、同歌が「恋歌」として入撰していることに注目すべきである。この点について、山田清市は、「勢語第十六段の背景と切り離して、「人」の集の本文をもって歌を解するならば、恋歌になる要素が極めて高い歌である。ことによると本来恋歌であつたものを、友情歌にするかえた可能性は十分生まれてくる。」と述べている。^{注4}

そのような疑似恋愛歌をやりとりする「友だち」関係にある二人だが、有常が最後に登場する第八十二段では、惟喬親王の狩りの「とも」をしている。

二、第八十二段における「とも」

むかし、惟喬親王の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。

時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことに

おもしろし。その木のもとにおりて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中にあたえてさくらのならせれば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。また人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき

とて、その木のもとには立ちてかへるに日暮になりぬ。御供なる人、酒をもたせて、野よりいで来たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭、大御酒まるる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり

親王、歌をかへすがへす誦したまうて、返しえしたまはず。紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせたまひぬ。夜ふくるまで酒飲み、物語して、あるじの親王、酔ひて入りたまひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にけて入れ
ずもあらなむ

親王にかはりたてまつりて、紀の有常、

おしなべて峰もたひらになりなむ山の端なくは月も
入らじを

この第八十二段では「馬の頭なりける人」について「時世経て久しくなりければ、その人の名忘れにけり」とされているが、『伊勢物語』が「男」の名前を明かさないので終始一貫した姿勢であり、今更明言する必要はない。わざわざ、時間の経過を理由に忘れたとすることで、逆説的に惟喬親王と紀有常の名前は忘れなかったことを示しているだろう。

ここで、在原業平・紀有常・惟喬親王ら三人の関係を整理しておきたい。業平と有常は、『古今和歌集』（巻十五恋歌五・七八四・七八五）の詞書において義理の親子関係にあつたとみられている。

業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむ
ることありてしばしのあひだひるはきてゆふさはかりはか
へりのみしければ、よみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるも
のから

返し、

ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがゐる山の風はやみ
なり

「天雲の」の歌には詠み人が記されておらず、有常の歌とするか、有常の娘の歌とするか解釈が分かれているが、同歌による『伊勢物語』第十九段では、「男」と「宮仕へしける女の方に、御達なりける人」との贈答歌となっており、有常の娘を通した義理の親子関係は改変されている。

また、有常と惟喬親王は、叔父と甥の関係であった。惟喬親王の母は「三条の町」と呼ばれた紀静子であり、有常の兄妹である。第六十九段の齋宮について、所謂「後人注」の「齋宮は水の尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬親王の妹」という一文から、「男」と惟喬親王の関係が女性を媒介にした関係として描かれるが、これは物語が意図的に結んだ線であって、実際の業平と有常、有常と惟喬親王を繋ぐ血縁関係は一切排除されている。三人の間を繋ぐ女性の存在が排除されているのである。

彼らは、狩りを目的にした集団のはずだが、酒と和歌に興じるばかりである。『伊勢物語』における「狩り」とは、初段の「奈良の京春日の里にしろよしして、狩りにいにけり」と出かけた先で「いとなまめいたる女はらから」を垣間見する場面や、第六十九段では、齋宮に出逢う「狩りの使」など、恋と深く関わる言葉である。「かりはねむごろにもせで」とは、恋をしないという意味を含んでいると考えられる。

なりひらの朝臣

次に、『伊勢物語』中で「やまと歌」と表現されるのはこの

箇所のみであることに注目したい。佐藤裕子^{注7}は、水無瀬・交野と実際に行われた狩りを結びつけ、「やまと歌」と表現される背景には、漢詩をつくる機会となっていた嵯峨天皇の遊獵が意識されていたことを指摘し、「嵯峨天皇の詩会が、遊獵中とはいえ、公的な、政治的な場であったのに対し、八十二段は逆に、惟喬親王と周囲の人々の『狩』を、私的なもの、非政治的なものとして打ち出していると考えられよう」と考察している。

「非政治的なもの」とされていることは、惟喬章段として続く第八十三段と第八十五段にも表れている。「さてまさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとともありければ、えさぶらひで（第八十三段）」や、「おほやけの宮仕へしければ、つねにはえまうでず（第八十五段）」とあり、惟喬親王のところにもつと長くいたいのだができない理由として、「おほやけごとども」、「おほやけの宮仕へ」が障害と表現されている。すなわち、惟喬親王との関係は公のことではない、私的なものとして描かれているのである。

「やまと歌」という言葉で同時代に用いられているのは、『古今和歌集』の仮名序の冒頭、「やまとうたは人のこころをたねとしてよろづのことはとぞなれりける」の一文である。「いきとしいけるもの、いづれかうたをよまさりける」という和歌に対しては皆平等であることを謳った精神は、第八十二段でも「その木のもとにおりて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり」にみられる。「かみ、なか、

しも」と階級を三つに分け、集団内の上下関係を一旦意識させるものの、「みな歌よみけり」と「やまと歌」を詠むことよって、その上下関係を解消させる。「その木のもとにおりて」という表現も、諸注釈では「馬から下りた」と解される部分だが、桜の木の下に座り、枝をかざしに挿すことで視覚的に高低差をなくし、皆を平面的な位置に置こうとする意図があるのではないだろうか。段末尾で有常が「おしなべて峰もたひらになりなむ」詠むところにも、イメージのレベルでこの平面化意識があらわれているだろう。

『伊勢物語』は、それぞれ独立した体裁をとりながら一連の流れをもっている。第八十三段が「例の狩しにおはします供に」という「例の」には前の第八十二段を指し、紀有常についても第三十八段、第八十二段では登場のたびに説明しないのは、第十六段を受けているからである。第十六段で「友だち」とされた「紀有常」と「男」の関係はその後も続いている。この「友だち」二人が第八十二段で惟喬親王の「御供」をしていることに注目してみたい。

三、「友」と「供」

『日本国語大辞典』によれば、「供」は「とも（友人のとも）と同語源」とある。勿論、第八十二段では、惟喬親王が「あるじの親王」と表現され、「仕うまつれりけり」とされていることから、ここでの意味は従者としての「供」であることは明らかである。惟喬親王と「男」と有常の関係は「御供」とある

ように、従者の「とも」であることは変わらぬ。しかし、「とも」には、友だちの意味の「友」も響いているのではない。つまり、「友だち」の「とも」と「御供」の「とも」は同音であることから、「男」と「有常」と「惟喬親王」との関係が「友だち」の「とも」に近づけているとは考えられないだろう。

「友」と「供」の同音性は、第八段と第九段の解釈において、古注釈書で問題視されている。物語中、最初に「とも」の語が登場するのは第八段である。天福本では「ともとする人ひとりふたりしてゆきけり」と仮名表記の「とも」だが、「ともとする人」について、『臆断』では第九段に漢字で「友」と記されていることから「友だち」として解釈されている。一方、『童子問』^{注10}は、「友」と「供」は音が通うことを指摘し、従者の意味とみている。「男」が東下りをする理由は、第三段から第六段に位置する二条后章段における悲恋を連想させているが、それは政治性を孕む極めて私的な問題である。「ともとする人」が男の「友だち」であるならば、『古意』がいうように、彼らには男とともに都を出て東国へ住むべき国を求めに行く理由はないはずである。友情の厚さを表現しているというより、ここは惟喬親王と「男」と有常との関係とは逆に、「友だち」に近い従者としての「供」の関係であったと考えられる。^{注11}

その他に、『伊勢物語』に「友」「友だち」が用いられるのは、第十一段、第四十六段、第六十六段、第八十八段、第百九段である。どのような関係として用いられているか確認してみ

たい。

第十一段は、

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせける。

忘するなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

東下りの途中で男が「友だちども」に和歌を詠むが、同じ歌が『拾遺和歌集』には「たちばなのただもとが人のむすめにしびて物いひ侍りけるころ、とほき所にまかり侍りとて、この女のもとにいひつかはしける」と橘忠幹が女に詠んだ歌となっている。第十六段の「年だにも」の歌が恋歌として『続千載和歌集』にある例と同様に、この第十一段の歌も詞書きを取り払ってみると、恋愛歌として成立する要素を持っている。

第四十六段には、

むかし、男、いとるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経ておこせたる文に、

あさましく、対面せで、月日の経にけること。忘れやしたまひにけむと、いたく思ひわびてなむはべる。世の中の人の心は、目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ。

といへりければ、よみてやる。

目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなればはおもか
げに立つ

というように、「いととるはしき友」が「かた時もさらずあひ
思ひける」存在として描かれる。『愚見抄』（続群書類従）第
十八輯上）では「まことの友だちをいへり。是も女をいへるに
や。」としているが、「人の国」へ行く理由は任官によると考え
られ、これも男性間の「友」と考えられる。ここでも「世の中
の人」が対照的に持ち出され、第三十八段での「世の中の人
恋といふらむ」など、一般論と比較する点も共通する。

第六十六段では、

むかし、男、津の国にしる所ありけるに、あにおとと友
だちひきゐて、難波の方にいきけり。渚を見れば、船ども
のあるを見て、

難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ
渡る船

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

というように、ここでは兄弟と並列される存在であり、世の中
に対する憂いの感情を共有する者たちとして描かれている。

第八十八段では、

むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集り
て、月を見て、それがなかにひとり、

おほかたは月をもめてじこれぞこのつもれば人の老い
となるもの

「友だちども」というように、第十一段と同じく友だち集団
が登場する。「いと若きにあらぬ」者たちの集まりの中の一人
である男が「老い」についての和歌を詠む構図だが、「いと若
きにあらぬ」の表現からこの「友だちども」は年齢が皆変わら
ない者たち、年齢差のない集団であると解釈できる。

最後、第百九段では、

むかし、男、友だちの人を失へるがもとにやりける。

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきに恋ひむ
とか見し

「友だちの人の失へる」とあり、妻と思われる「人」を亡く
した友人に対して、慰めの歌を贈っている。第十六段で妻が出
家した有常との関係にも似た、妻が不在の場での友だち関係が
描かれる。

以上が『伊勢物語』における「友」・「友だち」が登場する段
であるが、これらの例から「友」・「友だち」がどのような存在
であるか、三点挙げられる。まず、常に一緒にいたい存在であ
ること、次に、思いを同じくする者であること、最後に女性が

不在の空間で男性のみの関係で使われる点である。

『日本国語大辞典』には、「とも」の語源説として「何事も諸共にするので、其の義」が挙げられ、「その者・物と同質で同じ集団を構成する要員をさしている。仲間。つれ。」という意味もあり、一緒にいたい存在であること、思いを同じくする者であることについては「とも」の基本的な意味と重なる。しかし、女性が不在の空間で、男性のみの関係で使われる点については、辞書的な意味の範疇にはなく、『伊勢物語』特有の用法^{注12}と言える。

四、男性間における「友」

『古今和歌集』で「友だち」に詠んだとする和歌を、詞書を取り払って見たときに、恋愛歌の趣をもっていることは先述の通りだが、『伊勢物語』での「友」「友だち」もまた、第三十八段や第四十六段にみられるように、女性不在の空間で同性間の疑似恋愛、または同性愛ともいえる和歌を贈答する存在である。

このような、男性同士の歌のやり取りに恋愛歌の要素をもったものとして、『万葉集』^{注13}巻第十七の大伴家持と大伴池主との贈答歌が指摘されている。二人の膨大な歌の贈答に同性愛の感情を認める呉哲夫（『万葉の「交友」——大伴家持と同性愛——『日本文学』四四—一—号一九九五・一）の論は、「大伴」という姓を持つ家持が、歌を通じて「身分の上下関係を捨象した」と指摘する。しかし、直木孝次郎（『七、八世紀におけるトモの

表記について——友と伴を中心に——『萬葉』第一五四号 一九九五・七）も上代の「とも」の表記については、伴を友の意味に用いた歌は『万葉集』には一首もないことから、「友と伴はまったく通用していない」と述べ、辰巳正明（『交友論——家持の同性愛批判——『日本文学』四四—一—号一九九五・一—二）は、「交友のありようを支えたのは『文選』贈答の方法」と^{注14}呉の論を批判する。倉又幸良（『伊勢物語』の「友」の物語——恋の一代記の支え——『相模女子大学紀要（人文・社会）』A六三号二〇〇〇・三）は、こうした男性同士による恋愛的表現方法を持つ和歌の流れがあることを受け、『伊勢物語』で「友」の語を持つ章段が物語中に散在していることに注目し、

「友」の章段は、恋する男の一代記を支えるために所々に布置され、特に物語前半においては、男の恋の若さと激しさに対応して、異性愛的一面を抱え込んだのである。「友」の章段は、一代記を支え続けるために、物語前半では異性愛的にならざるをえなかったのではないか。「友」の章段の異性愛的一面には、伊勢物語固有の一代記性を見なければならぬ。

というように、「恋する男」の一代記性を支える意味を求め、このように、男性同士の疑似恋愛歌、同性愛雰囲気について否定的な論が多いが、呉論における歌によって身分の在家関係をなくすという構図の萌芽は認められる。『伊勢物語』におい

て女性不在空間で登場する「友」・「友だち」には、異性との恋の代替となる役割が求められていたとしても、双方に共通した意識が必要となる。業平と紀有常の義理父子関係が、「男」と有常の「友だち」とされ、有常と惟喬親王の叔父と甥の関係が「御供」と変えられ、血縁関係を消し去っているところに、精神的連帯感を強調していると考えられる。ここには、婚姻による血縁関係で摂関政治を行う藤原氏への強烈な皮肉が透かし見えよう。

五、政治的關係に対する精神的關係」とも

第十六段で「三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごとくもあらず」と背景設定の中で登場した紀有常は、その「紀の有常」という名前に政治的落伍者のイメージを付与されている。史料^{注15}に見る紀有常は、文徳天皇の時代に次々と叙任されているようにみえ、この背後には有常の妹で「三条の町」と呼ばれていた静子が、文徳天皇に寵愛されていたことが影響していると考えられる。しかし、清和天皇の時代に入ってから、これら叙任も滞りがちとみえ、この原因には静子との間に生まれた惟喬親王と、良房の娘染殿の后との間の惟仁親王の所謂「位争い」に敗北したからとされる。「三代実録」の清和天皇即位前紀^{注16}には、三人の兄を超えて清和天皇となる惟仁親王が、わずか生後九ヶ月で立太子したことから巷に「三超の歌」が流行したことを伝えている。「江談抄」^{注17}にも、文徳天皇には惟喬親王に位を譲る

意思があつたが、太政大臣の藤原良房に憚り、実現できなかったこと、両者は祈師らをたてるなど争つた様子が伝えられ、これは後に「大鏡裏書」や「平家物語」、「曾我物語」などに立太子争いがあつたと描かれていく。

片桐洋一^{注18}など、この「位争い」について否定する見方もあるが、実際にあつたか否かの論議は別とし、第十六段の冒頭では、有常を政治的敗北者として造型している。第十六段で「紀の有常」という実名を明かしていることに關して、花井滋春（『伊勢物語』実名表記攷―有常と惟喬の物語から―）『國學院大學大学院文学研究科論集』第一〇号一九八三・三）は、「両者が等質の反俗的且つ反逆精神で結ばれていたことを強調する」とし、神尾暢子（『伊勢物語の有常章段』『伊勢物語の成立と表現』新典社二〇〇三）は、「権力闘争に対抗させるものとして、友情を位置づけた」と描かないことでより強く政治性を表していると論じる。

「男」と政治的敗北者としての「紀の有常」を「友だち」とし、血縁関係を見せないことにより、世代差を無くし、疑似恋愛的和歌のやりとりによって、男性同士の連帯感を強める。「男」には二条后章段の悲恋と反藤原氏意識も底流しており、政治的力も家庭も失つた有常と共有できる要素がある。「あひ語らひける友だち」同士である二人が「御供」として仕える惟喬親王の存在により、政治的敗北者団体の雰囲気はますます濃厚になる。彼らが「やまと歌」によって共有する風流意識の裏側には藤原氏による摂関政治の舞台から退場した哀愁が漂う。

おわりに

惟喬親王に対して「男」と紀有常は主従関係であるが、精神的連帯感を核とした集まりであることを強調している。「御供」であっても、「公の宮仕へ」を対岸においた、極めて私的な関係である。「友だち」関係にある「男」と有常が「御供」をしていることに、「友」と「供」という二つの異なる関係を近づけ、惟喬親王を奉る一方で、「男」と有常の「友だち」関係に取り込むような連帯感を強めていると考えられる。

「とも」という言葉が持つ、友情関係と主従関係という異なった意味を区別しながら、一方で同化させる意識は、「かみ、なか、しも（第八十二段）」と身分差を意識させながら、直後「みな歌よみけり」と同化させることにも表れている。

勿論、繰り返すが、惟喬親王とは「友」ではなく基本的に「あるじ」と「供」の主従関係にある。しかし、有常の実名を明かす反面、婚姻による血縁関係を消し去り、女性を排除した空間でのみ現われる「友だち」として「男」との関係を結び、より精神面を強調した関係を築き上げている。二人は惟喬親王の「供」となり、「やまと歌」によって風流な精神的世界を共有する者たちの集合の核に惟喬親王は置かれるが、根底には政治的敗北者の連帯感がある。

「紀の有常」登場章段は、いわば惟喬親王章段への布石であるといえるが、そこに政治的敗北者としての影と、「紀の有常」という、在原業平と惟喬親王の血縁関係を持つ実名が必要であ

つたといえる。

注

1 「伊勢物語」本文は『新編日本古典文学全集』（小学館一九九四）による。また、『万葉集』『古今和歌集』、『続千載和歌集』、『拾遺和歌集』は『国歌大観』による。

1 「伊勢物語」に実名表記登場人物全体について論じたものには、深町健一郎「伊勢物語」の実名章段論―業平とのかかわりについて―（『中古文学論攷』第三号一九八二・一〇）、松田喜好「実名登場章段―伊勢物語の鑑賞5」（『二冊の講座伊勢物語』有精堂出版一九八三）、河地修「伊勢物語」の実名章段と和歌」（『文学論藻』第七一号一九九七・三）などがある。

2 石田稷二は、「がり」は、のもとへ、の意。愛する人同士、あるいはごく親しい人に限って使われる。（『新版伊勢物語』角川書店一九七九）とし、「ここに「紀有常がり」と言ったのは、主人公の男と有常との親密な関係を意識しての言葉づかいと見てよいであろう。ゆえに、一六段を踏まえての制作ということとは動かぬであろう。」（『伊勢物語注釈稿』竹林舎二〇〇四）とする。

3 渡辺実校注『日本古典文学集成』（新潮社一九七六）では「男は長く待った末に、遅く戻って「来」た有常と会い、翌日にでも自宅から「やりける」なのであろう。」

という状況とし、「女と逢った後朝のような格好」としている。

4 山田清市『伊勢物語成立論序説』（桜楓社 一九九二）

第一篇第四章

5 むかし、男、宮仕へしける女の方に、御達なりける人をあひしりたりける、ほどもなく離れにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男は、あるものかとも思ひたらず。女、

天雲のよそにも人のなりゆくかきすがに目には見ゆるものから

とよめりければ、男、返し、

天雲のよそにのみしてふることはわがる山の風はやみなり

とよめりけるは、また男ある人となむいひける。

返歌の初句に異動があるが、『古今和歌集』と同歌を用いている。

6 上野英二「狩と恋―伊勢物語ノート」（『成城国文学』第

一六号 二〇〇〇・三）は「狩は恋であった。ここに

『伊勢物語』の狩の本質がいかなるものであったか、明らかだろう。狩は、女性を狩ったのだ。」と『伊勢物語』における「狩」と「恋」を等号で結ぶ。

7 佐藤裕子「伊勢物語八十二段の生成―「狩」の設定を中

心に―」（『中古文学論攷』第二号 一九八一・一一）

8 『契沖全集第九卷』久松潜一監修・築島裕（他）編集 岩

波書店 一九七四

此段より下奥州まで下られたる事は、別の段にかけとも皆さきの段の末也。ともとする人は友とする人也。下にある人のいはく。かきつばたといふいつもしをくのかみにすゑてたひの心をよめといひければとあるは、此友の中也。古今集旅部に、兼輔の玉くしげふたみの浦はと云哥の詞書にも、ともに有ける人く、哥よみけるつるて」によめるといふは従者なり。これにはかはれり。

9 第八段の「ともとする人ひとりふたりして」の一文を持たない塗籠本系では、第九段も仮名表記の「とも」である。

10 『伊勢物語古注釈書コレクション第四卷』片桐洋一編

和泉書院 二〇〇三）

「友」といふ字をかきたりとても、それは、訓のかよふによりて書事、常の事なれば害なし。もとより、かな書は字義にはよらざる事なりけり。されば、此「とも」は、従者のこと、見るべし。「二人二人」とい、つき随ふ者、わづかに一人二人して行ける成べし。（中略）「むかし、男、京やすみうかりけん」と有に、友をかたらふべき理なく、人に知らせず、しのびてこそ出べければ、「従者とするもの、ひとり二人」にこそ理もかなふべけれ。友と見る、おもはざる説なるべし。

11 第八十二段では「その木のもとにおりあて」と桜の木の下に皆で座るが、第九段でも八つ橋に着き、「その沢の

ほとりの木のかげにおりて」と木の下に座る点は共通する。

12

平安時代の用例として他作品では、『古今和歌集』（友一四例、友だち一三例）、『大和物語』（友だち一三例）、『平中物語』（友だち一九例、友だちども一三例、こと友だちども一例）、『うつほ物語』（友一十三例、友だち一六例）、『源氏物語』（友一十例、友だち一二例）（『新編日本古典文学全集』による。）の用例を検討した。

13

一例として、『万葉集』巻第十七の贈答歌を挙げておく。八月七日夜集于守大伴宿祢家持館一宴歌

あきのたの ほむきみがてり わがせこが ふさた
をりける をみなへしかも (三九六五)

右一首守大伴宿祢家持作

をみなへし さきたるのへを ゆきめぐり きみを
おもひいで たもとほりきぬ (三九六六)
あきのよは あかときさむし しろたへの いもが
ころもで きむよしもかも (三九六七)
ほととぎす なきてすぎにし をかびから あきか
ぜふきぬ よしもあらなくに (三九六八)

右三首守大伴宿祢池主作

14

『伊勢物語』における「友」、「友だち」についても、山本登朗に漢籍の影響が指摘されているが、これに関しては稿を改めたい。

15

『日本三代實録』元慶元年正月二十三日条（國史大系第四卷）黒板勝美 國史大系編修會編 吉川弘文館一九三四）

廿三日乙未。從四位下行周防權守紀朝臣有常卒。有常者左京人。正四位下名虎之子也。性清警有儀望。少年侍奉仁明天皇。承和中權拜左兵衛大尉。數年右近衛權將監。兼近江權少掾。仁壽初遷左馬助。是年授從五位下。爲二但馬介。左馬助如故。俄而右兵衛佐兼讚岐介。尋授從五位上。迂左近衛少將。讚岐介如故。天安元年自左近衛少將。遷爲伊勢權守。同年除二少納言。兼二侍從。明年遷二肥後權守。貞觀九年爲二下野權守。秩滿爲二信濃權守。十五年授二正五位下。十七年爲二雅樂頭。十八年至二從四位下。爲二周防權守。卒時年六十三。

『古今和歌集目錄』紀有常（群書類從 第五輯）塙保己一編 続群書類從完成會 一九六四）

正四位下名虎男。承和十年正月任左兵衛大尉。嘉祥三年補藏人。四月二日任左近將監。五月十七日兼近江權少掾。文德御時。仁壽元年十一月廿六日敘從五位下。七月十六日任左馬助。三年正月十六日任左兵衛佐。齊衡元年正月兼讚岐介。二年正月七日敘從五位上。十五日任左近少將。兼。四年九月廿七日任二少納言。天安二年二月五日兼肥後權守。貞觀七年三月一日任二刑部權大輔。十三年三月二日兼二信濃權

守。十五年正月七日叙三正五位下。十七年正月十三日任雅樂頭。十八年正月七日叙二從四位下。元慶元年八月十五日任二周防權守。

16 『日本三代実録』清和天皇即位前紀 天安二年八月

(『国史大系第四卷』經濟雜誌社一八九七)

天皇。諱惟仁。文德天皇之第四子也。母大皇太后藤原氏。太政大臣贈正一位良房朝臣之女也。嘉祥三年歲在二

庚午二月廿五日癸卯。生。天皇於太政大臣東京一條第。

十一月廿五日戊戌。立為二皇太子。于レ時誕生九月也。

先是有二童謡云。大枝乎超天走超天躍止利騰加理超

天。我耶護毛留田仁耶。搜阿左理食無志岐耶。雄々伊志

岐耶。識者以為。大枝謂二大兄也。是時。文德天皇有二

四皇子。第一惟喬親王。第二惟條親王。第三惟彦親王。

皇太子是第四皇子也。天意若曰超三兄二而立。故有二此

三超之謡一焉。

17 『江談抄』第二雜事(一)(『新日本古典文学大系』山根

對助・後藤昭雄校注 岩波書店 一九九七)

天安皇帝、惟喬親王に讓位の志有る事

命せられて云はく、「天安皇帝、宝位を惟喬親王に讓

る志有り。太政大臣忠仁公、天下の政を惣摂し、第一の

臣為り。憚り思して口より出ださざる間、漸く数月を経

たりと云々。あるいは神祇に祈請し、また秘法を修し、

仏力に祈る。真濟僧正は小野親王の祈師為り、真雅僧都

は東宮の護持僧為りと云々。おのおの祈念を専らにし、

互ひに相猜ましむ」と云々。

18 片桐洋一『在原業平・小野小町 天才作家の虚像と実像』

(新典社 一九九一)

參議以上の人が皆無の紀氏を外戚とする惟喬親王よ

り、最高権力者である右大臣藤原良房を外祖父とする惟

仁親王が立太子するのは、当時としては、いわば当然で

あつて、長子相続が原則となつて後代の常識で事を

押し測ることは適當ではない。

【付記】本論は中古文学会関西西部会第一六回例会における口

頭発表を基にしております。ご意見・ご教示いただいた先

生方に深くお礼申しあげます。